

全国ブロック選抜U-12 体操競技選手権大会

2018年版適用規則

公益財団法人 日本体操協会
審判委員会体操競技男子審判本部

○作成のねらい

U-12適用規則は第1回大会（2006年）より、常に『美を競う』という体操競技の本質に照準をあて『姿勢の美しさ』、『動きの美しさ』を優先して評価できるよう考慮して作成された。

同年、国際体操連盟は10点満点から現在のオープンスコア方式に規則を変革した。当初は難度点をかさ上げするため、高難度志向の潮流が見られたが、10数年が経ちD・E方式でも美しさへの評価、正確で安定した演技が重要であることが改めて認識されてきた。

現在の体操競技は『姿勢の美しさ』、『動きの美しさ』に加え、様々な技を数多く習得することが必要となっている。D・E方式が普及・浸透し、今では国際的なジュニア競技会でも同じ形式の採点規則が適用されるようになってきている。これによりジュニア世代においても、『美しさ』の追求とともに巧みな技捌き、様々な技への取り組みが必然となってきている。

上記を踏まえ、12歳以下の選手たちの将来を見据え、U-12の適用規則においてもD・E方式を採用することで、U-12適用規則→中学校適用規則（U-15）→高等学校適用規則→一般ルールへと一貫性をもった採点方法とし、選手の段階的な成長への道標を指し示すこととした。

今までの採点方式と形式が替わろうとも、『美しい体操』を最優先することには変わりはない。日本の体操の根幹となる『美しい体操』に対する評価の仕方、その育成のための考え方については適用規則に盛り込み、段階的な成長にあわせてこのルールが運用されるように設定した。技数は6技とすることで、身体への過度な負担を軽減するとともに、ひとつひとつの技への習熟度を高めることを意図している。

指導者の方々には、この大会に出場する年代の成長過程を考慮し、将来を見据えたなかでこの時期に求められる『姿勢の美しさ』、『動きの美しさ』の獲得を目指して指導していただきたい。

審判の方々は、一般の採点規則はもとより中学校適用規則（U-15）にも精通し、技の難度や難しさに評価が偏ることなく（高難度志向への傾斜の抑制）、幅広いジュニア層の段階的指導の道標を示すべく、『美しい体操』に評価基準においてこの適用規則を活用していただくようお願いする。

とくにジュニア期に培わなければならない、選手としての美しい姿勢づくりや基本的な技の習熟度を見極め、評価するように心がけていただきたい。

本規則の採用にあたっては、本競技会及び予選競技会とするが、この規則に適合しない競技会においては独自の規則を設け、児童期の体操競技の育成にあたっていただく事をお願いしたい。

第1章 演技の採点

第1条 原則

1. 次に示すもの以外は、(公財)日本体操協会制定 2017年版体操競技男子採点規則を適用とする。

第2条 決定点

1. 決定点の構成

(1) 決定点は、次のような配点により構成される。

演技構成	(Dスコア：5技 + 終末技 + 技のグループ)
+ 実施	(Eスコア：10.00 - 減点) + 加点 (最大 0.50)
- N D	(ニュートラル・ディダクション：ライン減点、タイム減点、技数不足等)
<hr/>	
決 定 点	

2. 演技構成、および技のグループと特別要求 (種目特有の要求)

(1) ゆか、あん馬、つり輪、平行棒、鉄棒の演技は次の技数を要求する。

a) 技数 6技 (5技+終末技)

i) 技は難度により、次の得点 (難度点) が与えられる。

A : 0.10 B : 0.20 C 以上 : 0.30

(2) 技のグループ、および特別要求 (種目特有の要求)

a) 跳馬を除く 5 種目において次のグループを要求する。

i) 終末技を除き 3つの技のグループの内、2つを要求する。

(1 グループにつき 0.50。0.50 × 2 グループ = 1.00)

※ 3つの技のグループを実施しても 1.00 となる。

ii) 終末技の技のグループ (A 難度以上 0.50)

b) 技のグループは次の通りとする。

ゆか)

- I 跳躍技以外の技
- II 前方系の跳躍技
- III 後方系の跳躍技
- IV 終末技

あん馬)

- I 片足振動・交差技
- II 旋回・旋回倒立・転向技
- III 旋回移動・転向移動技
- IV 終末技

つり輪)

- I 振動・振動倒立技
- II 力技・静止技
- III 振動からの力静止技
- IV 終末技

平行棒)

- I 両棒での支持技
- II 腕支持振動技
- III 長懸垂・逆懸垂振動技
- IV 終末技

鉄棒)

- I 懸垂振動技
- II 手放し技
- III バーに近い・アドラー系の技
- IV 終末技

c) 特別要求（種目特有の要求）

ゆか、つり輪、平行棒において次の技を特別要求（種目特有の要求）として演技構成に入れること。要求を満たさない場合は各々0.30のNDとする。なお、6技に入れる必要はない。

- ① ゆか ・ 倒立静止
 - ・ 3方向の前後および左右開脚座
 - ・ 片足バランス技
- ② つり輪 ・ 倒立静止
- ③ 平行棒 ・ 倒立静止

(3) 難度認定の特例

a) a 難度（スモール・エー）

i) 体操競技の健全な発展と評価、そして普及の観点から次の技を「a 難度」とし0.10の難度点を与える。ただし、技のグループは満たせない。主な a 難度は第6条2の通り。

b) a 難度を除き、難度表に掲載されていない次の技を特例として難度を認定する。

(技のグループと技数を満たす)

つり輪	I	・ 屈腕の車輪倒立静止（前方・後方）	: C 難度（実施減点で対応）
	IV	・ 前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・ 後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
平行棒	I	・ 前振りひねり（ツイスト）45°未満	: C 難度（実施減点で対応）
	IV	・ 前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・ 後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
鉄棒	III	・ 足裏支持回転倒立	: A 難度
	IV	・ 前方かかえ込み宙返り下り	: A 難度
		・ 後方かかえ込み宙返り下り	: A 難度

(4) 跳馬の価値点（Dスコア）

a) 跳馬の価値点（Dスコア）は、原則として、日本体操協会採点規則2017年版・跳馬価値点一覧表(1)の技を0.40高く設定する。

b) 跳馬の価値点（Dスコア）は、3.2を上限とする。

c) 切り返し系の技（開脚とび、閉脚とびなど）の難度点（Dスコア）は1.0とする。

d) 台上前転は前転とびと同じ難度点（Dスコア）とする。ただし、姿勢的な減点の他、器具にぶつかるなど大欠点以上の減点を伴う。

e) 跳馬の価値点（Dスコア）は、別紙「U-12跳馬価値点一覧表」に定める。

第3条 実施

1. 実施

(1) 実施は10.00から実施減点を差し引いた得点をEスコアとする。

2. 実施減点

(1) 正しい演技からの逸脱は、すべて実施欠点であり、審判員によって相応の減点がなされる。小、中、大欠点の大きさは、正しい実施からの逸脱の程度により判定される。小、中、大欠点等の減点はFIGルール of 減点に準ずる。ただし落下のみ0.50とする。

3. 減点に関する特例

(1) つり輪、平行棒、鉄棒において、正しい実施のもとに意図して実施された振れ戻りは減点の対象としない。

例)

鉄棒：後ろ振り上がりや逆手から順手への両手持ち換え

- (2) 飛距離、高さ等に対する減点は体格などを考慮し選手が不利にならないように採点する。また、競技会のレベルも考慮し審判員が判断する。

4. 加点

- (1) 加点は、E 審判が採点後の E スコアに得点（該当する加点）を加算する。
 (2) 着地を止めた場合は安定した着地に対して、0.10 の加点をする。(a 難度を除く)
 (3) 美しさ、雄大さなどに最大 0.40 の加点を与えることができる。なお、この加点は必ずしも技に対して与えるものではない。ゆかで直立した時の姿勢や意識されたつま先など、競技会の主旨、レベル等を考慮し審判員が各自で判断する。ただし、E スコアに加点を与えて 10 点を超えることはできない。
 (4) 組み合わせによる加点は与えない。

第4条 ND

1. ニュートラル・ディダクション

- (1) あん馬において、馬体の 3 部分を使用しなかった場合の ND は適用しない。
 (2) ゆかにおいて、2 回宙返りを実施しなくても ND の対象にはならない。
 (3) ゆかにおいて、4 つのコーナーに達しなくとも 2 つの対角線上（2 ライン）での実施が認められれば ND の対象にはならない。2 ラインの使用がなければ減点対象とする。
 (4) つり輪の振動倒立静止の要求はしない。よって演技構成になくとも ND の対象にはならない。
 (5) 短い演技（技数不足）に対する ND は、体操競技の普及、および教育的配慮の観点から次の通りとする。

6～5 技	0.00
4～1 技	3.00

第5条 禁止技

1. 以下の禁止技を実施した場合は、その演技を 0 点とする。
 (1) 難度表に記載されている FIG ジュニアルールの禁止技
 ・ つり輪のグチョギー系の技
 ・ 平行棒の宙返りから腕支持となる技
 (2) 前方に 2 回以上の宙返りをする技

第6条 その他

1. 事故防止と選手の精神的援助のためつり輪、跳馬、平行棒、鉄棒において 2 名までの補助者が立つことが許される。
 2. 主な a 難度を以下に示す。示された技以外は競技会の主旨、レベル等を考慮して審判員が各自で判断する。

ゆか)

- ・ 前転技群（前転、開脚前転、伸膝前転、倒立前転）1 技まで
- ・ 後転技群（後転、開脚後転、伸膝後転、後転倒立）1 技まで
- ・ 側方倒立回転
- ・ ロンダート

あん馬)

- ・ 四つ足（左入れ～右入れ～左抜き～右抜き）
- ・ 2 つ目以降の横向き旋回（両把手、馬端、逆馬端でそれぞれ 1 つの技）
- ・ 2 つ目の正交差、2 つ目の逆交差（左右それぞれ 1 つの技）
- ・ (馬端中向き)上向き下り

つり輪)

- ・ 肩倒立

平行棒)

- ・開脚前挙支持
- ・腕支持～後ろ振り上がり支持
- ・懸垂前振り～後方かかえ込み宙返り下り（棒間）
- ・前振り～後方かかえ込み宙返り下り（棒間）

鉄棒)

- ・懸垂前振りひねり
- ・懸垂前振り逆上がり
- ・後ろ振り上がり支持
- ・両手を同時に持ち換える技
- ・前方支持回転、後方支持回転
- ・後方足裏支持回転振り出し下り

3. 器械器具の寸度

ゆ か	12m×12m	
器械種目	床面からの高さ	マットの厚さ
あん馬	115～116cm	10～12cm 演技開始時の跳びつき用として 50cm までの補助台を使用可
つり輪	265cm	18cm または 20cm
跳馬	120cm	18cm または 20cm
平行棒	175cm	12cm
	185cm	20cm
鉄棒	265cm	18cm または 20cm

※ つり輪、跳馬、鉄棒については、着地マットの使用を認める。

※ 跳馬の跳躍版は、ハードタイプ（3-3-2）・ソフトタイプ（3-1-2）を使用する。
ソフトタイプ（3-1-2）はコイルを外し（2-1-2）として使用することを認める。
使用後は必ず責任をもって元に戻すこと。

※ 平行棒は機械により±2cmを認める。

以上